

リヨン時代の荷風

松 田 良 一

I

永井荷風がリヨンのペラーシュ駅に着いたのは明治四十年七月三十日の早朝であつた。その二日後にはペラーシュ駅近くのホテルからローン川東岸のワンドーム街の下宿に移った。しかし『西遊日誌抄』は、この後、八月三日から十二月三十一日までのリヨンの生活を記していない。その欠落させた意図については以前拙稿『西遊日誌抄』の世界』（稲山女学園大学研究論集）第十九号昭63・2）で述べた。『西遊日誌抄』でリヨンの生活が記されているのは明治四十一年一月一日からリヨンを離れる三月二十八日までである。『西遊日誌抄』はイデス問題、父久一郎との軋轢などを記している一方で、荷風が通った音楽鑑賞の記録もまた丹念に書き込んでいる。アメリカ滞在時代の『西遊日誌抄』が「オペラ鑑賞日記」という意味をもっていたとするなら、リヨン滞在中のそれは「クラシック音楽鑑賞日記」の意味を担っていた。ただ、リヨン滞在時代の『西遊日誌抄』にはコンサートに行ったことが記されている程度で、その

コンサートの全容を記しているわけではない。今回、リヨン市立図書館所蔵の新聞資料などから、荷風が鑑賞していると証言しているコンサートの演奏曲名が判明した。この内容を紹介しつつ、荷風のリヨンにおける芸術生活を検討したいと思う。

荷風がリヨンに滞在していた期間に、当地で発行されていた新聞には次のようなものがあつた。

『LE DEPECHE DE LYON』(1905～1920)

『LE TOUT LYON』(1895～)

『LE SAULT PUBLIC』(1848～1944)

『LE NOUVELLISTE DE LYON』(1879～1944)

『LE PASSE TEMPS』(1876～1909)

『LE LYONNAIS PUIS LYON REPUBLICAIN』(1878～1944)

これらの新聞の記述を突き合わせてコンサートの内容を確定したが、これを見ると『西遊日誌抄』や『ふらんす物語』での記述内容が、二、三新聞記録と異なり正確でないことが分かった。例えば、『ふらんす物語』所収「舞姫」の次のような箇所である。

われの始めて君(ローザ・トリアニ……引用者注)を見まつりしは、その年の秋、君が未だリヨン市設のオペラ座の舞台に出で給わざる前なりし。ローン河の横わる橋々の袂に、その年の初演奏はワグナーのワルキール、次の夜にはグノーがフォーストとの予告は出でたり。

リヨン、オペラ座(GRAND THEATRE)のオペラシーズン(一九〇七―一九〇八)の初日がワルキール、第二日がフォーストとしている。しかし、初日の十月十二日は確かに「ワルキューレ」であつたが、第二日の十月十三日は「ウイ

リアムテル」であった。実際「フォースト（ファウスト）」が演じられたのは八日後の十月二十日のことである。また荷風が「フォースト」に出演したローザ・トリアニを「プリミエール・ダンスス第一位舞踏者」としているが、少なくとも当時の新聞劇評に彼女の名はあらわれていない。このシーズンに「フォースト」がオペラ座で上演されたのは十月二十日のほか十一月一日、十一月十四日、十一月二十三日、十二月一日、十二月八日、そして翌年一月九日、二月九日、二月十五日の九回であった。十月二十日上演の新聞劇評はみられないが、十一月一日、十四日、二十三日の上演については劇評及び案内が出ており、そこで取り上げられている女優はマルグリッド役の BERTHE CESAR のほか STRELETSKI RAMBAUD、CELESTE GRILL、CLASSES、GOULAN COURT、HATTO らであった。してみるとはローザ・トリアニは一般的世評の高い女優というより荷風好みの女優ではなかったのだろうか。一目でマルグリットに狂ったように恋したファウストに荷風は自らを見立てていたのかもしれない。

次に明治四十一年一月一日以降の音楽鑑賞記録を見てみる。『西遊日誌抄』（『西遊日誌稿』も含む）に記載されている鑑賞記録は次のようである。

- (1) 正月二日 寒き夜なり。オペラを聴かんとして下宿を出でしかど心何となく疲れたれば散歩して帰る。
- (2) 正月十九日 里昂市設オペラ劇場に催さる、音楽会に赴く。ベートーヴェンの第五管弦楽及びベルリオズの「伊太利のハロルド」最も心を打ちたり。
- (3) 正月二十五日 タンホイゼルを聴く。
- (4) 正月二十六日 ○コンセル、クラシックに行き、例の如く音楽を聴く。（『稿』）
- (5) 正月二十九日 銀行に赴かず終日床に在り。夜雨ありしがサンホオニリヨネーズの演奏会に赴く。年少のオロニストマイヤーというものの、弾じたるベートーヴェンの曲神秘いふばかりなく殆人をして

恍惚たらしめたり。

再びタンホイゼルを聴く。

(6) 正月三十日

(7) 二月二日

○例の如く午後の音楽会に行く。(『稿』)

(8) 二月八日

○例のコンセル、クラシックに音楽を聴く。(『稿』)

(9) 二月九日

○午後マノンを聴く。オペラを出て、後、夕暮の街を散歩する。(『稿』)

(10) 二月十六日

里昂在住の音楽家某が新作にかゝる歌劇アドレーンの初演奏あり。里昂付近の田舎家のさまにてワグナー式のチームを用ゐし所大当りなりき。

(11) 二月十七日

○サンフォニーの演奏会に赴く。(『稿』)

(12) 二月二十五日

夜は波蘭土の樂師が演奏するショープンの会に赴きたり。

(13) 三月二日

○夜サンフォニーを聴く。(『稿』)

(14) 三月九日

この夕ワグナーのマイステルジンガーを聴く。

(15) 三月十六日

歌劇ウエルテルを聴く。

(16) 三月十七日

○カッフェーにてローヘン格林の音楽をさく。(『稿』)

まず、(1)の正月二日の記述から見ると、この日は木曜日で普通ならオペラ座ではマチネはないが、新年なのかマチネには「LE CHRETIEN」が上演されており、夜はモーツァルトの「魔笛」であった。もしかしたら、荷風が行かなかったのはこの演目を嫌ったためではないか。というのは「魔笛」の主役王子タミノ(テノール)はある国の王子とされているが、日本の狩衣を着て演じる。荷風は「蝶々夫人」を嫌ったように日本人が登場するオペラを嫌い、避けていた。

1908. 1. 12

(第一部)

- 1 「ドン、ジョバンニ」の序曲 (W. A. モーツアルト)
- 2 「イタリアのハロルド」の断章 (A. ベルリオーズ)
 - I タベの祈りを歌う巡礼の行進
 - II アブルレッチの山人が愛人によせるセレナード
- 3 「交響曲第五番ハ短調『運命』」 (ベートーベン)
 - I ALLEGRO CON BRIO
 - II ANDANTE CON MOTO
 - III ALLEGRO (SCHEZO); ALLEGRO (FINAL)

(第二部)

- 4 交響的変奏曲「イスタル」 (V・ダンディ)
- 5 オーケストラとヴィオールのための四楽章組曲 (ローレンズィテュ)
 - M. カサドッシュの演奏
 - I ALLEGRETTO
 - II MENUETTO
 - III ANDANTE
 - IV FINAL
- 6 「フリビエールのオラトリオ」の前奏曲 (V. ヌビーユ)

(2) の正月十九日(日曜日)の記述には問題がある。実はこの日オペラ座は「カルメン」を上演していて、『西遊日誌抄』の記した演目を上演していない。心を打ったというベートルーベンの「交響曲第五番」とベルリオーズの「伊太利のハロルド」が演奏されたのは正月十二日のことである。『西遊日誌抄』も正月十九日と記しており、この間違いをみると、『西遊日誌抄』のもとになったと思われる『西遊日誌稿』も、きちんと毎日記録されたものではなく、記憶をもとにしばらく日が経ってから記されるということがしばしばあったことが分かる。この日の演目は上記のようである。

このなかで「フリビエールのオラトリオ」(V. NEUVILLE 作曲)の曲の内容はよく分からない。

「オーケストラとヴィオールのための四楽章組曲」(LORENZETET 作曲)でのヴィオールは十五世紀から十六世紀によく用いられた弦楽器(後述明治41・2・20付西村渚山宛書簡で「キオル」と記している)である。フリビエールはリヨン市内を流れるソーヌ川西岸の高台にあるフリビエール聖母教会のことを言う。人々は市街を一望できるこの高台をフリビ

エールの丘とよんでいる。

(3) の一月二十五日(土曜日)は確かに夜八時からオペラ座で「タンホイザー」が上演されていた。

(4) の一月二十六日(日曜日)のコンセル、クラシックも『西遊日誌稿』の記したように開かれていた。ただし場所はオペラ座ではなく、ラファイエット広場十八番地の会場である。当日の演奏曲目は上記のとおりである。

J・M・ルクレール(一六九七—一七六四)はパリのオペラ座、コンセル・スピチエルでバイオリニストとして活躍した作曲家である。またボワデッフル(一八三八—一九〇六)はフランスの室内楽の作曲家。

(5) 一月二十九日(水曜日)のシンフォニーリヨネーズの演奏会はオットー、メイヤーが客演である。ただ演奏曲名が『LE TOUT LYON』紙一月二十六日付の「LES CONCERTS — OTTO MEYER A LYON —」欄と『LE SALUT PUBLIC』紙の一月二十八日付の「ECHOS DES SPECTACLES」欄では多少異なる。恐らく荷風が感動したと語っているオットー、メイヤーの演奏曲は「バイオリン協奏曲ニ長調」(ベートーベン)であろう。オットー、メイヤーについては一月二十六日付「ECHOS DES SPECTACLES」と一月二十九日付の「LES CONCERTS」で紹介されているが、それによると彼はシカゴの芸術学校で学び、そのあとベルリンでジャコブソンの指導を受け、さらにプラハでSEVEKの学校で学び、そしてブリュッセルで名バイオリニストのE、イザイエ(YSAÏE 一八五八—一九三二)のもとでバイオリンの指導を受けた。「LES CONCERTS」欄ではオットーメイヤーは、このイザイエから「スタイル」を

1908. 1. 26

(第一部)

- 1 「ドン・ジョバンニ」の序曲 (W. A. モーツアルト)
- 2 「ローエングリン」より (R. ワーグナー)
- 3 「トリオ・ソナタ ニ長調」 (J. M. ルクレール)
- 4 「交響詩『オルフェス』」 (F. リスト)

(第二部)

- 1 「ピアノ三重奏第十番」 (J. ハイドン)
- 2 「伝説」 (R. ド、ボアデッフル)
- 3 「アルルの女」より (G. ビゼー)

1908. 1. 29 (『LE TOUT LYON』紙による)

- 1 「交響曲第三番ハ短調」 (サンサーンス)
- 2 「バイオリン協奏曲ニ長調 (カデンツ)」 (ベートーベン)
- 3 a) 「海」 (V・ダンディー)
- b) 女声二重唱曲「ロルモンの踊り」 (C. フランク)
- 4 「僧ムーレの法罪」 (A. プリュノー)
- 5 a) 「ユーモレスク」 (A. ドヴォルザーク)
- b) 「メヌエット」 (G. F. ヘンデル)
- c) 「バイシエルロの『水車小屋の娘』の
『わが心うつろになりて』による変奏曲」 (N. パガニーニ)
- 6 「オラトリオ『聖パウロ』の序曲」 (F. メンデルスゾーン)

『LE SALUT PUBLIC』(1月28日付)紙の「ECHOS DES SPECTACLE」欄の1月29日の演奏プログラム

- 1 「交響曲第三番ハ短調」 (サンサーンス)
- 2 a) 「海」 (V・ダンディー)
- b) 女声二重唱曲「ロルモンの踊り」 (C. フランク)
- 3 「僧ムーレの法罪」 (A. プリュノー)
- 4 バイオリンの小品 オットーメイヤーの演奏
- 6 「オラトリオ『聖パウロ』の序曲」 (F. メンデルスゾーン)

学び、SEVEKの学校で「方法」を学び力強い確かな技術を身につけたと評されている。^{注1)}
(6)の一月三十日(木曜日)には『西遊日誌稿』の記述のように、オペラ座の夜の公演で「タンホイザー」が上演されていた。

(7)の二月二日(日曜日)の「例の如く午後の音楽会」とはグランコンセール協会(SOCIETE DES GRANDS CONCERTS)主催、この日第四回定期コンサートがオペラ座で開かれた。当日はオペラ座のプラモンドン(PLAMONDON)とリヨン神学校合唱団が共演し、次頁上段のような曲を演奏した。

G・コートレ(一五三〇頃ー一六〇六)はシャルル九世の宮廷音楽家、C・クレマン(一四五八頃ー一五五八)は教会司祭で二人とも十六世紀フランスシャンソンの代表的作家である。「ファウスト交響曲」の三人の人物描写は、普通ファウスト、グレートヒェン、メフィストフェレスであるが、ここではグレートヒェンではなくてマルガリットになっている。

1908. 2. 2

- 1 「エジプト脱出」 M. プラモンドンのソロ (A. ベルリオーズ)
 - 2 二つの古い歌 (G. コストレ、C. クレマン)
 - 3 「交響曲ファウスト」(三人の人物描写による) (F. リスト)
 - 1) ファウスト
 - 2) マルガリット
 - 3) メフィストフェレ
- そして「テノールソロによる終曲」 (M. プラモンドンのソロ)

1908. 2. 7

(第一部)

- 1 「マイスタージンガー」の序曲 (R. ワーグナー)
- 2 「幽霊船」より (R. ワーグナー『さまよえるオランダ人』のシナリオによるピエール・ルイ・ディーチェの作曲)
- 3 エルザの夢 (「ローエングリン」より) (R. ワーグナー)
 - 聖行進曲 (「ローエングリン」より) (R. ワーグナー)
 - 二重奏 (「トリスタンとイゾルデ」より) (R. ワーグナー)

(第二部)

- 1 「タンホイザー」より (R. ワーグナー)
- 2 「イゾルデの死と前奏曲」 (R. ワーグナー)
- 3 「ラインの黄金」 (R. ワーグナー)
- 4 「ヴォータンの別れの歌」(「ジークフリート」より) (R. ワーグナー)

(8) 二月八日(土曜日)に「コンセル、クラシック」を聴くとあるが、この日に「コンセル、クラシック」は公演されていない。「コンセル、クラシック」は前日の七日(金曜日)に開かれている。当日はワーグナー音楽の特集であった。

(9) 二月九日の日曜日に「午後マノンを聴く」とあるが、この日オペラ座は「ファウスト」を上演しており、しかも午後八時開演で、終わったあと「オペラを出て後、夕暮の街を散歩す」(『西遊日誌稿』)ということとは出来ない。また、この日にはマチネはない。もうひとつリヨンでオペラを上演していたセレスタン劇場の二月九日の出し物は「REVUE DE CELESTENS (セレスタンレビュー)」であった。このシーズンでオペラ座が「マ

1908. 2. 17

- 1 「交響曲第三番変ホ長調」 (R. シューマン)
 - 2 「バイオリン協奏曲イ長調 トルコ風」 (W. A. モーツァルト)
J. ブッシェリー演奏
 - 3 「交響詩『ヴィヴィアン』」 (E. ショーソン)
 - 4 「森のささやき」(「ジークフリート」より) (R. ワーグナー)
 - 5 「ロシアの主題による協奏的幻想曲」 (R. コルサコフ)
 - 6 「歌劇『グヴェンドリーヌ』の序曲」 (C. シヤブリエ)
- 80人編成のオーケストラ演奏、指揮M.G.M. ヴィトコウスキー

1908. 2. 25 ショパンコンサート

- 1 「ピアノソナタ第二番変ロ短調 (葬送行進曲)」
- 2 「夜想曲第二番変ホ長調」
- 3 「マズルカ変ロ長調」(ただし52番か、56番か不明)
- 4 その他、バカロール、ワルツ、即興曲、練習曲、タラン
テラ、スケルツォ (変ロ短調)

「ノン」を上演したのは一月十二日、二月十六日、二月十九日、二月二十日、三月三日、三月十三日である。荷風はこのいずれかの日に鑑賞したのである。

(10) 二月十六日の日曜日に聴いたとされている「歌劇アドレーン」は荷風の間違いか、もしくは岩波版荷風全集の誤植ではないだろうか。この日オペラ座は夜「マノン」を上演し、マチネに「MADELEINE」を上演している。日本語表記するとアドレーンではなく、マドレーヌということになる。

(11) 二月十七日(月曜日)「サンホオニーの演奏会」とはオペラ座で午後八時四十五分から開かれたグランコンセール協会(SOCIÉTÉ DES GRANDS CONCERTS)の第五回演奏会のことである。この日はバイオリン奏者のJ・ブッシェリー(BOUCHÉRT)が客演で、八十人編成のオーケストラと「バイオリン協奏曲イ長調」と「ロシアの主題による協奏的幻想曲」を演奏した。八十人編成のオーケストラはリヨンでは珍しい大編成であった。

(12) 二月二十五日(火曜日)の「ショパンの会」とはサン・アントワーヌ三十番地にあったフィルハーモニックホール(SALLE PHILHARMONIQUE)で夜八時半から開かれた

1908. 3. 2

- 1 「交響曲第三番へ長調」 (J. ブラームス)
- 2 「ピアノ協奏曲第三番ハ短調」 (ベートーベン)
アルフレッド・コルトー演奏
- 3 「アンジェー地方の二つの民謡による幻想曲」 (G. ルクー)
- 4 「フランス山人の主題による交響曲」 (V・ダンディー)
アルフレッド・コルトー演奏
- 5 曲名不明
(80人編成のオーケストラ演奏、指揮M.G.M. ヴィトコウスキー)

「CONCERT CHOPIN — KOCZALSKI」演奏会のことである。波蘭土（ポーランド）の楽師とはR・コクザルスキーというピアニストである。

(13) 三月二日の月曜日に聴いた「サンフォニー」とはグランコンセル協会(SOCIÉTÉ DES GRANDS CONCERTS)の第六回演奏会のことである。この夜八時四十五分からオペラ座で開演された。客演はピアニストのA・コルトー(CORTOT 一八七〇—一九六二)である。彼は「ピアノ協奏曲第三番ハ短調」「フランス山人の主題による交響曲」を演奏した。このうちコルトーはフランスの著名なピアニストに成長し、昭和二十七年十月には来日して演奏会を開いた。しかし、『断腸亭日乗』にはこの来日演奏会に出かけたという記録はない。

(14) 三月九日（月曜日）の夕刻、『西遊日誌抄』に記されたようにオペラ座でワーグナー作曲の「ニュルンベルグのマイスタージンガー」が上演された。この曲はリヨンのオペラ座にとって初演であった。

(15) 三月十六日（月曜日）に『歌劇ウエルテル』を聴く」とあるが、この公演はオペラ座の通常の「SOIR」（夕方）公演ではなく、「SOIRÉE」（夜）公演で九時前後の開演であった。しかも「老人への献金コンサート」(AU BÉNÉFIC DU DERNIER DES VIEILLARDS)という慈善公演であった。

以上が荷風がリヨン時代に鑑賞した「音楽」の内容である。

II

リヨン滞在中なかでも明治四十年分の日記がなく、荷風の生活ぶりについてよく分からない面が多いが、少なくともニューヨーク時代に比してオペラ鑑賞が少なくなった。当時リヨンにあった常設の劇場（シネマを含めて）は、次の十六館である。

GRAND THEATRE	THEATRE DE CELESTINS	NOUVEAU THEATRE
CASINO KURASSAL	THEATRE GUIGNOL DE FAMILLES	SCALA
GUIGNOL DE GYMNASSE	GUIGNOL DE PASSAGE DE LARGUE	UNIVERS CINEMA
PALAIS GLACE	THEATRE CINEMA PATHE GROLEE	CINEMA PATHE
HORLOGE	CINEMA TO GRAPHE A ROTA	THE ROYOL VIO (NOUVEL ALCA-
		ZAR と明40・3 改名)

このうちモンテスキュー通り (MONTESQUIEU) 四番地にあった CINEMA PATHE は明治四十一年一月閉館し、逆に CINEMA TO GRAPHE A ROTA が市役所通り (L'HOTEL DE VILLE) 九十八番地に明治四十一年一月に開館した。荷風はこのうち映画館には行かなかった。THE ROYOL VIO などは勤務先に近く、利用していたかもしれないが、日記や書簡には表れてこない。これらの劇場のうちオペラを上演したのはオペラ座とセレストアン劇場だが、ただセレストアン劇場は時々オペラを上演するぐらいで（例えば、一九〇八年二月二十日のマチネに「フィガロの結婚」、殆ど

は本格的なオペラではないレビューである。オペラ公演の主流はオペラ座 (GRAND THEATRE) であった。しかし、このオペラ座のオペラも荷風はあまりみなかった。実は勤務先の横浜正金銀行リヨン支店とオペラ座は百メートルぐらいしか離れておらず、支店前のレピュブリック通りからみると二つの建物が背中あわせのようにみえる。荷風はあまりに勤務先に近いオペラ座の公演に出かけるのを避けたかもしれない。むろん、演奏曲目にも問題があった。荷風滞在中のオペラ座の公演日程を論文末に記したが、演奏された曲目を回数順に並べてみると次のようになる。

(ドイツ、オーストリアのオペラ)

○ヘンゼルとグレーテル (フンパーディンク) 8回

ニュールンベルグのマイスタージンガー (ワーグナー) 6回

○ワリキューレ (ワーグナー) 3回

魔笛 (モーツァルト) 3回

○タンホイザー (ワーグナー) 2回

(イタリアのオペラ)

○ウィリアム、テル (ロッシーニ) 7回

○ラ・ボエーム (プッチーニ) 7回

エロディアド (マスカーニ) 4回

○アイーダ (ヴェルディ) 3回

○リゴレット (ヴェルディ) 2回

○カヴァレリア、ルステイカーナ (マスカーニ) 2回

(フランスのオペラ)

○ファウスト(グノー)

サムソンとデリラ(サンサーンス)

タイス(マスネ)

ミニョン(トマ)

○ラクメ(ドリーブ)

ナヴァラの娘(マスネ)

ハムレット(トマ)

○ロメオとジュリット(グノー)

ユグノー教徒(マイヤベーヤ)

マドレーヌ

○カルメン(ビゼー)

ミレイユ(グノー)

ファウストの劫罪(ベルリオーズ)

その他のオペラ

25	2	4	4	4	4	5	5	6	7	7	8	8	9
回	回	回	回	回	回	回	回	回	回	回	回	回	回

曲名の上に○をつけたのが、ニューヨークですでに鑑賞したオペラである。してみると荷風にとってリヨンのオペラ座の公演曲目は必ずしも新鮮なものとは言えなかった。リヨンでは、ニューヨークで感動したワーグナーのオペラをも

う一度味わい、フランス人作曲家のオペラを少し鑑賞する程度であった。ニューヨークではオペラ作家を目指し、猛烈にオペラに出かけた。しかし、やがて荷風は眼高手低の感に陥り、オペラを育てえない明治日本の現状を考えるとオペラ作家への道を断念せざるをえなかった。リヨン入りした荷風には、もはやオペラ作家になる修行としてのオペラ鑑賞はなくなったのである。明治四十一年二月二十日、リヨンから友人の西村渚山に次のような手紙を送っている。

小説以外に全力を傾注してゐるのは音楽だ。外観的のオペラから進んで純音楽に入った。自分はピアノもオオルンも楽器は手にしないが毎夜必ずコンサートに出掛けて一時間位は音楽をきく事にして居る。(傍線筆者による) ここでいう「純音楽」とはクラシック音楽のことである。リヨンで聴いた音楽のうち感動した曲を、荷風は次のように記した。

近頃聴いたもの、中で殊に面白かつたのはベルリオ作の「伊太利に於けるチャイルドハロルド」の一曲であった。百人近くのオーケストルで此のオーケストルは伊太利の古代の景色を描いてゐる中に一挺のオオル(胡弓の一種)がハロルドの淋しい心寧ろ旅人の淋しい心を歌つて行く。其れから又仏詩人マラルメの「森の神の午後」といふ有名詩を音楽にしたものを聞いた。此れはフランスの DEBUSSY といふ音楽家の作であつて人に強い印象を与える点は文学で云へばマラルメやメーテリリンクの作物に均しきものであらう。いや音楽の話をしだすと夢中になつて切りがないから他日に譲る事としよう。

ドビッシの「牧神の午後への前奏曲」は鑑賞期日が不詳であるが、「イタリアのハロルド」は一月十二日に聴いたものである。荷風はロマン派の音楽から進んで、古典の形式から自由になつて作曲家の個性的な感覚、感情を發表する印象派の音楽をより好み、音楽のもつ「描写力」に強くひかれた。絵画の「描写」とは違ふ音楽の「描写」をフランス人作曲家の曲にみたのである。荷風は西欧音楽界が印象主義的な音楽への流れにあることを感じとりつつ、

この音楽動向の「歴史的関係は文学に於ける自然主義の経路と全く同様」(前掲渚山書簡)と的確に捉えていた。やがて、この音楽と文学に共通する印象主義的表現方法に荷風は強く影響されることになるのである。

この大きな流れの他、もう一つ当時リヨンでの音楽界にはある傾向などがあった。リヨンでの定期演奏会はグランコンセール協会(SOCIÉTÉ DES GRANDS CONCERTS)の定期演奏会のほか、「シンフォニーリヨネーズ」(SYMPHONIE LYONNAISE)、「コンセル・モラン」(CONCERT MAURIN)、「コンセル・クラシック」(CONCERT CLASSIQUE)があった。とりわけグランコンセールの協会の定期演奏会に頻繁に出掛けているが、その入場券は勤務地から一キロメートルほど離れたベルクール広場の観光協会で買うか、開演一時間前からオペラ座で売り出されるのを待つて手に入なければならない、荷風は相当熱心な観客の一人であった。しかも、演奏会の開かれる日も週末とは限らず、勤め人には夜遅い演奏会は単なる息抜きを超えていた。荷風はリヨン郊外の散歩とともに、このクラシック音楽に銀行勤務の憂鬱を癒していた。このグランコンセール協会は上節の二月十七日の演奏会で指揮をしているM・G・M・ヴィト・コウスキー(WITKOWSKI)が一九〇五年に結成したものである。ヴィトコウスキーは始め軍学校にいたが、のちV・ダンディ(D'INDY)の音楽学校「スコラ・カントルム」(SCHOLA CANTORUM 一八九四設立)で学んだ。その後リヨンに移りこの協会を設立し、一九二四年から一九四十年までリヨン交響楽団の指揮者をつとめるなどリヨン音楽界の実力者であった。彼はV・ダンディの弟子で、師の考えを受け継いだひとであった(M. BOUCHER『M. G. M. WITKOWSKI』1926)。グランコンセール協会はいわばスコラ、カントルムのリヨン分校の意味合いを持っていた。スコラ、カントルムは旧来の教会音楽の復元、研究、フランス民謡の学術的研究に励んだ。その根底にはC・フランク、サンサーンスが設立した「国民音楽協会」の旗印である「ガリアの芸術」^{注2}復興に通ずる。ドイツ、イタリア、スペイン、ロシアの影響下にさらされていたフランス音楽を民族的エネルギーを結集して新たにつくりだして行こうと

いう運動であった。このC・フランク、サンサーンスのあとを受けて「国民音楽協会」の会長になったのがV・ダンディであった。伝統的にリヨンはパリに対抗心をもやっていた保守的な土地柄で、パリで始まったフランス大革命の折には反革命の旗を揚げたところである。その意味でも民族主義的な国民音楽は受け入れられやすかった。ヴィトコウスキーのグランコンセール協会の演奏会も1節で記したように、師のV・ダンディの曲「交響的変奏曲イスタル」(二月十二日)、「フランス山人の主題による交響曲」(三月二日)はむろんのこと、「フリビエールのオラトリオ」(二月十二日)、「G・コートレ、C・クレマンの二つの古い歌」(二月二日)、ショーソン作曲の「交響詩『ヴィヴィアン』」(二月十七日)、ルクー作曲の「アンジェー地方の二つの民謡による幻想曲」(三月二日)などフランス人の作曲によるものやフランスの地方を歌ったもの、そしてフランスの古い歌など、いわば民族主義的な音楽を意識的にとりあげていた。二月八日の「コンセール・モラン」でもフランス人作曲家J・P・ラモーや、V・ダンディの師であるC・フランクの曲を積極的に取り上げ演奏している。

荷風は「新帰朝者日記」(初出は「帰朝者の日記」明42・10)の中でショパンの「小夜曲(夜想曲)」、ピアノソナタ第二番「埋葬曲(葬送行進曲)」(以上二月二日の項)、ヴェルディ「アイーダ」、サン＝サーンスの「アフリカ幻想曲」、マスネ「アルジェリアの女」(以上二月二日の項)、ヴェルディの「リゴレット」(十二月十四日の項)ストラウス「エレクトラ」(二月二十日の項)をとりあげて西洋音楽の何たるかを説明するが、それはリヨンで聴いた経験に裏打ちされたものである。「新帰朝者日記」の主人公は、日本の音楽界が「単純に西洋音楽は日本音楽よりも高尚である深遠である」と云ふ盲目的判断、寧ろ迷信に支配されて「いることを憂える。盲目的に外国文化に追従し日本文化を卑下していた日本人にいらだちを覚えたのである。江戸期の音楽に目を配り「新しい日本に新しい音楽」を興そうと考えるこの主人公を荷風が創出しえたのは、文化的伝統をもつ、いわば文化大国フランスが、いかに国民に根ざし

た音楽を新たにつくだそうと苦しんでいたか、フランス音楽界の实情をリヨンで知ったことが大きい。リヨンで外国音楽の影響から脱却するためにフランスの古曲を掘り起こし、フランス人作曲家の発表機会をつくったヴィトコウスキーらの熱情を肌で感じとってきた成果であった。

注

(1) オッターメイヤーにゆづる『LE SALUT PUBLIC』の記事は、次のとおりである。

LE PUBLIC LYONNAIS APPRENDRA AVEC PLAISIR QUE LE CÉLÈBRE VIOLONISTE AMÉRICAIN OTTO MEYER SE FERA ENTENDRE, DANS NOTRE VILLE, POUR LA PREMIÈRE FOIS, LE MERCREDI 29 JANVIER, AU NOUVEAU THÉÂTRE, POUR LE 2^e CONCERT DE LA SYMPHONIE LYONNAISE.

OTTO MEYER, QUOIQUE JEUNE EST UN VIRTUOSE DES PLUS REMARQUABLES DE L'ÉPOQUE. IL EST NÉ À LA PORTE (INDIANA), OÙ IL COMMENÇA SES ÉTUDES QU'IL CONTINUA AU CONSERVATOIRE DE CHICAGO. PUIS IL PARTIT À BERLIN TRAVAILLER SOUS LA DIRECTION DE JACOBSEN.

DE LÀ IL SE RENDIT À PRAGUE, OÙ IL DEVINT, COMME KUBELIK, L'ÉLÈVE DE SEVICK. ENFIN, NE VOULANT PAS SE CONFINER DANS UNE SEULE ÉCOLE, IL SE RENDIT À BRUXELLES POUR COMPLÉTER AVEC LE MAÎTRE ISAYE SA BRILLANTE ÉDUCATION MUSICALE.

OTTO MEYER EST ARTISTE EXCEPTIONNELLEMENT COMPLET, UNISSANT À LA TECHNIQUE PUISSANTE DE LA MÉTHODE SEVICK LE STYLE TRÈS PUR DE L'ÉCOLE D'ISAYE.

(2) デュフルク『フランス音楽史』(遠山一行ほか三名訳 昭47・7)

(3) 「コンセール・モラン」での演奏曲名は次のようなものであった。

1908. 2. 8

(第一部)

- 1 「ピアノ三重奏第三番 ハ短調」 (ベートーベン)
- 2 「魔弾の射手」 (K. ヴェーバー)
- 3 a) アリア (S. バッハ)
- b) ガボット (S. バッハ)
- 4 「恋のインド」 (J. P. ラモー)
- 5 「三つの協奏的ピアノ三重奏曲 嬰へ短調」 (C. フランク)

(第二部)

- 1 「パーシファル」 (R. ワーグナー)
- 2 「仮面舞踏会」 (G. ヴェルディ)
- 3 「モスクワの思い出」 (H. ヴィエニャウスキ)
- 4 「プロエルメルのパンドン祭」 (G. マイアベーヤ)

荷風リヨン滞在期間中におけるオペラ座の演奏曲名。

一九〇七年

10月12日

「ワルキューレ」(ワーグナー)

13日

「ウイリアム、テル」(ロッシーニ)

14日

休演 (RELACHE)

15日

「ハムレット」(A・トマ)

16日

「ラ、ボエーム」(ブーチャーニ)

17日

休演

18日

「ミニョン」(A・トマ)

19日

「カヴァレリア、ルスティカーナ」(P・マスカーニ)

20日

マチネ公演「ハムレット」A・トマ

21日

「ファウスト」(グノー)

22日

休演

23日

「ラクメ」(L・ドリーブ)

24日

「ウイリアム、テル」(ロッシーニ)

25日

「ラ、ボエーム」(ブーチャーニ)

26日

休演

27日

「アイーダ」(ヴェルディ)

28日

「ミニョン」(A・トマ)

29日

マチネ公演「ファウスト」

30日

休演

31日

「ワルキューレ」(ワーグナー)

1日

「リゴレット」(ヴェルディ)

31日

「ナヴァラの娘」(J・マスネ)

11月1日

「ファウスト」(グノー)

2日

マチネ公演「ラ、ボエーム」、「カヴァレリア、ルスティカーナ」

3日

「ハムレット」(A・トマ)

4日

「ミニョン」(A・トマ)

5日

「アイーダ」(ヴェルディ)

6日

「ナヴァラの娘」(J・マスネ)と「ラクメ」(L・ドリーブ)

7日

「サムソンとデリラ」(サンサーンス)

8日

「アイーダ」(ヴェルディ)

9日

「ミニョン」(A・トマ)

10日

「ラ、ボエーム」(ブーチャーニ)

11日

マチネ公演「アイーダ」(ヴェルディ)

12日

休演

13日

「ナヴァラの娘」(J・マスネ)と「ラクメ」(L・ドリーブ)

14日

「ウイリアム、テル」(ロッシーニ)

15日

「ファウスト」(グノー)

15日	休演		
16日	「フォルトウニオ」(A・メサージュ)		
17日	「サムソンとデリラ」(サンサリンス)		
18日	マチネ公演「ミニョン」(A・トマ)		
19日	休演		
20日	「エロディアド」(P・マスカーニ)		
21日	「フォルトウニオ」(A・メサージュ)		
22日	「サムソンとデリラ」(サンサリンス)		
23日	「フォルトウニオ」(A・メサージュ)		
24日	「ファウスト」(グノー)		
25日	「リゴレット」(ヴェルディ)とバレエ音楽 マチネ公演「ラクメ」(L・ドリープ)		
26日	休演		
27日	「ハムレット」(A・トマ)		
28日	「フォルトウニオ」(A・メサージュ)		
29日	「エロディアド」(P・マスカーニ)		
30日	休演		
12月1日	「ラ、ボエーム」(ブーチャーニ)		
	「ファウスト」(グノー)		
	マチネ公演「ナヴァラの娘」(J・マスネ)		
	「サムソンとデリラ」(サンサリンス)		
2日	休演		
3日	「タイス」(J・マスネ)		
4日	「サムソンとデリラ」(サンサリンス)		
5日	「AMES ENEMIES」		
6日	「タイス」(J・マスネ)		
7日	「カルメン」(G・ビゼー)		
8日	「ミニョン」(A・トマ)		
	マチネ公演「ファウスト」(グノー)		
9日	休演		
10日	「タイス」(J・マスネ)		
11日	「ヘンゼルとグレーテル」(E・フンパーディング)		
12日	「カルメン」(G・ビゼー)		
13日	休演		
14日	「ヘンゼルとグレーテル」(E・フンパーディング)		
15日	「エロディアド」(P・マスカーニ)		
	マチネ公演「タイス」(J・マスネ)		
16日	休演		
17日	「サムソンとデリラ」(サンサリンス)と「CHALET」		
18日	「ファウストの劫罰」(H・ベルリオーズ)		
19日	「ヘンゼルとグレーテル」(E・フンパーディング)		
20日	グランコンセール協会のコンサート		
21日	「タイス」(J・マスネ)		
22日	「カルメン」(G・ビゼー)		
	マチネ公演「エロディアド」(P・マスカーニ)		
23日	休演		
24日	「魔笛」(モーツァルト)		

25日	「ウイリアム、テル」(ロッシーニ)	10日	休演
26日	「ヘンゼルとグレーテル」(E・フンパーディング)	11日	「ハムレット」(A・トマ)
	マチネ公演「タイス」(J・マスネ)	12日	「ラクメ」(L・ドリーブ)
27日	「魔笛」(モーツァルト)		マチネ公演(グランコンセール協会のコンサート)
28日	「ウイリアム、テル」(ロッシーニ)	13日	休演
29日	「ジャネットの結婚」	14日	「MESSLINE」
	マチネ公演「ウイリアム、テル」(ロッシーニ)	15日	「ロミオとジュリエット」(グノー)
30日	休演	16日	「タイス」(J・マスネ)
31日	「ファウストの劫罰」(H・ベルリオーズ)	17日	「MESSLINE」
		18日	「ミレーユ」(グノー)
		19日	「MESSLINE」
		20日	休演
1月1日	「ミニョン」(A・トマ)	21日	「MESSLINE」
2日	「魔笛」(モーツァルト)	22日	「ミレーユ」(グノー)
	マチネ公演「LE CHALET」	23日	「MESSLINE」
3日	休演		
4日	「サムソンとデリラ」(サンサーンス)と「ジャネットの結婚」	24日	休演
5日	「タイス」(J・マスネ)	25日	「タンホイザー」(ワーグナー)
	マチネ公演「ラ、ボエーム」(ブーチャーニ)「ナヴァラの娘」(J・マスネ)	26日	「MESSLINE」
6日	休演		マチネ公演「ヘンゼルとグレーテル」(E・フンパーディング)
7日	「ロミオとジュリエット」(グノー)	27日	休演
8日	休演	28日	「マノン」(J・マスネ)
9日	「ファウスト」(グノー)	29日	「MESSLINE」
		30日	「タンホイザー」(ワーグナー)

一九〇八年

31日	「マノン」(J・マスネ)	22日	「ユグノー教徒」(G・マイアベリーヤ)
		23日	「MESSLINE」
2月1日			マチネ公演「ラ、ボエーム」(ブッチャーニ)
2日	「MESSLINE」	24日	休演
	「ヘンゼルとグレーテル」(E・フンバーディング)	25日	「ヘンゼルとグレーテル」(E・フンバーディング)
	マチネ公演(グランコンセール協会のコンサート)	26日	「ヘンゼルとグレーテル」(E・フンバーディング)
3日	休演	27日	「MESSLINE」
4日	「MESSLINE」	28日	休演
5日	「LES DRAGONS DE VILLATS」	29日	「ユグノー教徒」(G・マイアベリーヤ)
6日	「ロミオとジュリエット」(グノー)		
7日	休演	3月1日	「カルメン」(G・ビゼー)
8日	「MESSLINE」		マチネ公演「MESSLINE」
9日	「ファウスト」(グノー)	2日	グランコンセール協会のコンサート
10日	休演	3日	「マノン」(J・マスネ)
11日	「マドレーヌ」	4日	休演
12日	「ラクメ」(L・ドリーブ)	5日	「ユグノー教徒」(G・マイアベリーヤ)
13日	「MESSLINE」	6日	休演
14日	「マドレーヌ」	7日	「ロミオとジュリエット」(グノー)
15日	「ファウスト」(グノー)	8日	「ミニョン」(A・トマ)
16日	「マノン」(J・マスネ)	9日	マチネ公演「サムソンとデリラ」(サンサーンス)
17日	グランコンセール協会のコンサート		「ニュールンベルグのマイスタージンガー」(ワーグナー)
18日	「MESSLINE」	10日	「ラクメ」(L・ドリーブ)
19日	「マノン」(J・マスネ)	11日	「MESSLINE」
20日	「マノン」(J・マスネ)		
21日	休演		

12日	「ニュールンベルグのマイスタージンガー」(ワーグナー)	20日	休演
	ナ―	21日	「ニュールンベルグのマイスタージンガー」(ワーグナー)
13日	「マノン」(J・マスネ)		
14日	「ニュールンベルグのマイスタージンガー」(ワーグナー)	22日	「ロミオとジュリエット」(グノー)と「マドレーヌ」
	ナ―	23日	休演
15日	「ジャネットの結婚」	24日	休演
16日	「ウイリアム、テル」(ロッシーニ)	25日	「ユグノー教徒」(G・マイアベーヤ)
17日	「ニュールンベルグのマイスタージンガー」(ワーグナー)	26日	「ニュールンベルグのマイスタージンガー」(ワーグナー)
	ナ―		
18日	「タイス」(J・マスネ)	27日	「ナヴァラの娘」(J・マスネ)
19日	「ヘンゼルとグレーテル」(E・フンパーディンク)と「マドレーヌ」	28日	「ウイリアム、テル」(ロッシーニ)

(付記)

本稿は梶山女学園大学海外研修制度に基づき実施したアメリカ、フランス研修の中間報告である。リヨン滞在中、リヨン大学のジャン・ショレー教授御夫妻には格別お世話をいただき、また愛知県立大学の山方達雄教授、本学の中川晋介教授、国文学研究室には様々な御高配を賜った。記して深く感謝申し上げます。